



フルコースでどうぞ 家庭科 深度直子

読書のフルコース『はなのみち』 深度直子

いつのころからでしょうか、本を読むのに気合いがいるように

なっていました。なぜ気合いがいるかというと、読み始めると最後まで読み切らないと気が済まないからです。また、読んでいる途中で、一々不明点を調べたり、人間関係図や部屋の間取りを書いてみたりと、横道に逸れるので、最終的に徹夜する羽目になるのです。そして、「こんなことをして良かったのか？」という罪悪感の発生、しばらく読まないでおうとうという反省…読む前から見えています。しかしこの夏は、(HONTOのためにも)新しい本を読もう、と決意しました。本屋さんに行くと、夏休みの課題図書等、子ども向けコーナーに目がゆきます。変な本がありました。その名も『さんねんないきもの事典』(今泉忠明)というものです。例えば「あらいくまは手を洗わない」のだそ



うです。夏のはじめ、我が家にはアライグマ親子が毎夜出没して、溜め水で手とぶどうをゴソゴソ洗って食べて(いるように見え)ましたが、これは洗っているのではなく、食べ物を手探りで探しているのだそうです。人の姿を見ても逃げなかったのは、目が悪かったからのようです。楽しく、生物の特徴的な行動の意味や進化について分かる雑学本です。2冊目は寺山修二の『家出のす



め』という本に、これは名前が惹かれて手に取りました。「家出」というのはある意味「親からの自立」ということです。現在の家族はとても仲がよく、友達のような関係になってきていると言われています。反抗期もなくなってきました。平和でいいように見える半面、人生の中での成長発達という点から考えると、単純に安堵はできません。戦後すぐの古い本とはいえ、今の高校生や大学生は読んでみると視野が広がると思います。さて、このような感じで高校生の皆さんにおすすめの本を浅く広く紹介していきたいと思います。そして突然ですが、本を紹介するにあたって、急にフランス料理のコース形式にしてみました。まず手始めに、この夏の2冊は前菜とします。

次に、スープくらいの位置づけで、マンガを紹介しましょう。『天は赤い河のほとり』(篠原千絵)は私が初めて大人買いした文庫版全十六巻の本です。青銅器しかなかった時代に鉄製武器を世界で初めて使用したのは現在のトルコのヒッタイトという民族だと言われています。この話では、主人公はタイムスリップしてこの時代に行ってしまいます。色々な民族や人物、たとえばエジプトのラムセスなんかも登場します。歴史の勉強は覚えるのが大変ですが、ストーリーがあると感情移入して読むのでスラスラと頭に入ってきます。また、ゆかりの土地に行ってみたいと感じるのも歴史関連マンガのいいところです。和歌山はエルトゥールル号事件のこともあり、トルコは特に身近に感じませんか？



三番目のパンとしては、「人はパンのみに生きるにあらず」という言葉から私が思い浮かべたのは音楽でした。茂木大輔の『オーケストラ楽器別人間学』は音楽好き、音楽をやっている人、やってみたい人はぜひ読んでください。特に吹奏楽をやっている人、今までモヤモヤしていたことがすっきりするかもしれません。楽器の指南本ではありません。プロのオーボエ奏者である著者が自身の経験に基づいて鋭くかつユーモラスに他者を分析しています。楽器別行動パターンや、芸能人が楽器をするならこれ、といったことと、今から楽器をするならあなたはこれ！という適性検査まで盛りだくさんな内容です。ところでここまで言っておきながらですが、前述の「人はパンのみに…」という言葉は「だから音楽とかの文化・精神面が大事」という一般的な解釈は間違っているようです。

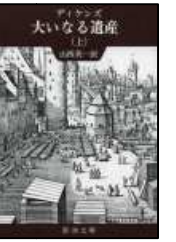


そして、魚料理、ここでは日本人作家の本としましょう。ドラマ化もされた高田郁の『みをつくし料理帖』シリーズは料理と江戸時代もの好きにおすすめです。主人公は大阪出身ですが、訳あって江戸に出てきて当時は珍しい女料理人として試行錯誤します。ストーリーのハラハラドキドキに加えて、この作品には「医食同源」ということが一貫されているように感じます。ちなみに同じ作者の『あい』という話は実在の蘭学医である関寛斎の話で、援助者



としてあの濱口梧陵が登場します。更に、どかんと肉料理、ここでは海外の小説とします。大学で英米文学の授業を受講し、紹介された小説を読み、海外の生活に思いをはせました。最初に読んだのはディケンズの『大いなる遺産』だったように思います。じめじめと暗い話でした。成功本ではありません。でも、19世紀イギリスの社会がよく分かり、このころ以降海外の小説も読むようになりました。直接的な歴史物語もいいですが、過去の小説を読むとその時代の生活や社会の常識が基盤となっている点も面白いです。現在は過去の上に成り立っているため、過去を理解することはとても大事な作業だと私は考えています。

海外小説の二冊目は皆さんご存じのモンゴメリの『赤毛のアン』です。『赤毛のアン』は小学生向けの話だと思っておりましたが、「大人がもう一度きちんと読むべき本」のナンバーワンです。シリーズは文庫版で全12冊にもなり、登場人物は多種多様、ものすごい人数です。時代も国も違うにもかかわらず、今にも通じる人間模様と、この本も料理が満載です。



最後にデザート的位置づけで、詩や童話はどうでしょうか。ふとした時に頭に浮かぶ言葉を紹介しましょう。小学校一年生くらいで習った『はなのみち』は、くまが自宅で袋を見つけて友達のりすの家に見せに行ったら、袋に穴があいていて中身は空、「しまった穴があいていた」。でも春になるとくまの家からりすの家に続く「花の一本道ができました」。なぜなら袋の中身は花の種だったからです。単純な話ですが、私の心にずっと残っていて、「しまった」といわれると「穴があいていた」と言いたい衝動に駆られます。一生懸命やったけれど失敗に終わったことが後で形を変えて大きな成功や喜びになることもある、というメッセージを読み取ったからかもしれません。



また、穂村弘の短歌「サバンナの象のうんこよきいてくれるいせつないこわいさみしい」も一度聞いたら忘れられないものです。何でうんこ？何で象？何で「白浜」とかじゃなくてサバンナ？でも何とも言えないやりきれない気持ちと、乗り切ろうとする力も伝わってきます。気のせいかもしれませんが私は勝手にそう受け取りました。本も出ています。

そして谷川俊太郎の有名な詩「生きる」(『谷川俊太郎詩集』等)は、「いま生きているということ それはのどがかわくということ」に始まり、色々な「それは…」が続きます。私が気に入っているのは「それはミニスカート」と「それはピカソ」です。は？と思いますが、多様性や可能性を感じるこの言葉が好きです。ぜひ全詩を読んでください。途中の「いまいまが過ぎていくこと」、最後は「あなたの手のぬくみ いのちということ」で締めくくられています。今回詩を確認して初めて知りましたが、歌にもなっているようです。



最後に古典で習った漢詩は非常にリズムカルで楽しく、日本語の会話が漢文だったら面白いなと思っていました。簡潔で人生訓に満ちている点も、無駄嫌いな私の感性にフィットしてくれるようです。中でも、杜甫の『春望』の冒頭「国敗れて山河在り、城春にして草木深し」は私の心の安定剤です。くじけそうになった時、思い切ってチャレンジする時、思い出します。自然の力は偉大で、それに比べて人間一人の力なんてありんこ程でもないから、逆にやってみようか、と勇気づけられるのです。

さて、私の実際の食事の傾向と同じく、少々デザートボリュームが多くなりましたが、詩でもマンガでも子ども向けでも、何か一冊くらいは読みたいものは見つかりましたか？本を読む理由の一つは時間の節約があります。でもやっぱり時々思うのは、「真実は小説よりも奇なり」ということで、現実世界が一番面白く、感動的で逆に悲しく無情でやるせないのです。みなさんのストーリーを紡いでいってください。

さて、私の実際の食事の傾向と同じく、少々デザートボリュームが多くなりましたが、詩でもマンガでも子ども向けでも、何か一冊くらいは読みたいものは見つかりましたか？本を読む理由の一つは時間の節約があります。でもやっぱり時々思うのは、「真実は小説よりも奇なり」ということで、現実世界が一番面白く、感動的で逆に悲しく無情でやるせないのです。みなさんのストーリーを紡いでいってください。

さて、私の実際の食事の傾向と同じく、少々デザートボリュームが多くなりましたが、詩でもマンガでも子ども向けでも、何か一冊くらいは読みたいものは見つかりましたか？本を読む理由の一つは時間の節約があります。でもやっぱり時々思うのは、「真実は小説よりも奇なり」ということで、現実世界が一番面白く、感動的で逆に悲しく無情でやるせないのです。みなさんのストーリーを紡いでいってください。